

研究種目：基盤研究（B）  
研究期間：2007～2010  
課題番号：19320137  
研究課題名（和文） 地方をフィールドとした朝鮮半島系住民のネットワークと生活世界の多声性に関する研究  
研究課題名（英文） A study on the Network of Korean People Living in the Province and Variety of Voices of their World.  
研究代表者  
島村 恭則（SHIMAMURA TAKANORI）  
関西学院大学・社会学部・教授  
研究者番号：10311135

研究代表者の専門分野：文化人類学・民俗学

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学

キーワード：少数者研究、在日朝鮮半島系住民、地方地域社会、生活世界の多声性、ネットワーク、日常の実践、引揚者、民俗

#### 1. 研究計画の概要

本研究は、地方の地域社会を主たるフィールドに、朝鮮半島系住民が切り結ぶさまざまな地域的ネットワークと、彼らの生活世界の多様な実態について明らかにすることを目的としている。この目的を達成するため、本研究では、北海道、日本海沿岸、中・四国、九州の各地方都市、および東京都、横浜市、大阪市をフィールドとした共同、個別調査を実施する。そしてその成果の相互比較にもとづいて、日本列島上の各地方を結ぶ朝鮮半島系住民のネットワークと各地方地域社会における朝鮮半島系住民の生活世界の实態について、中範囲の理論的フレームを提示し、これにより、これまで大都市中心に行なわれてきた既存の朝鮮半島系住民研究の成果の相対化をはかろうとするものである。

#### 2. 研究の進捗状況

国内の地方地域社会をフィールドに、共同調査（北海道、宮城、広島、兵庫、大分）、個別分担調査（岩手、宮城、東京、神奈川、京都、大阪、香川、鳥取、広島、山口、福岡、宮崎、鹿児島、沖縄）を着実に実施すると

もに、共同調査に併設して共同研究会を開催してきた。これらの調査・研究会活動により、従来の在日朝鮮半島系住民研究に多く見られた「在日コリアンの民族文化／民族アイデンティティについての分析枠組み」には必ずしも収まりきらない生活世界の多声性、ネットワーク形成のダイナミズムについて豊富な実証的データと理論的見通しを得ることができた。また、調査の進展とともに、地方都市の朝鮮半島系住民における引揚者や進駐軍との相互関係（戦後混乱・復興期において、朝鮮半島系住民と引揚者との間に葛藤・共棲関係があること、進駐軍の基地の存在が朝鮮半島系住民の居住地移動を規定すること等）に関する知見も得ることができた。これらの知見を含む、現時点までの科研の研究成果については、学会において報告（グループ発表「植民地」と「移住者」の民俗学）。発表者は、島村・岡田・鈴木・宮下。日本民俗学会第61回年会、2009年10月4日）を行なうとともに、順次、論文・著書として刊行中である。とりわけ、2009年度には、研究代表者の島村恭則が、科研の中間成果をふまえた民俗誌『〈生きる方法〉の民

俗誌—朝鮮系住民集住地域の民俗学的研究—』を刊行し、現時点までの研究成果を公開することができた。以上のことから、本研究の進捗状況は、順調であると自己評価できる。

### 3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)

本課題において設定している共同調査、個別分担調査については、着実にこれを実施している。また、3年度目である2009年の秋には、本課題の中間成果報告を日本民俗学会で実施した(グループ発表「〈植民地〉と〈移住者〉の民俗学」。発表者は、島村・岡田・鈴木・宮下。2009年10月4日、國學院大学)。また、同じく2009年度には、メンバーそれぞれの雑誌論文刊行等に加え、研究代表者の島村が、科研3年間の中間成果をふまえて執筆した著書『〈生きる方法〉の民俗誌—朝鮮系住民集住地域の民俗学的研究—』(関西学院大学出版会、2010年3月刊)を上梓することができた。さらに、『在日コリアン事典』(連携研究者の高正子が編集委員として参画。明石書店、2010年刊行予定)にも、本科研メンバーが、科研での成果を大幅に取り入れた原稿を多く寄稿した。こうしたことから、本課題は、計画通り順調に進展していると自己評価するものである。

### 4. 今後の研究の推進方策

これまでの3年間の成果にもとづき、さらに先鋭化した問題設定(戦後復興期の地方都市における朝鮮半島系住民と引揚者、進駐軍との相互関係等)による調査と分析を進め、4年間の成果の取りまとめへと向かう予定である。その際、最終段階直前の成果報告の機会として、日本文化人類学会での分科会発表を組織し、研究代表者(島村)、および研究分担者(岡田・鈴木)、連携研究者(高・宮下)による学会報告を実施する(分科会「『多文化共生』研究批判—「混線」する文化の民族誌から—」2010年6月13日、

立教大学)。また、最終的な科研の成果については、研究代表者、研究分担者、連携研究者による個別論文発表に加え、本科研の成果にもとづく、新たな「多文化」研究のあり方を示した著作(大学テキストとして作成することを検討中)の刊行をめざす。また、科研成果の社会還元の一環として、2010年11月に福岡市博物館で開催予定の「在日韓人歴史資料館開設5周年記念・福岡特別展」(本科研研究協力者の羅基台が企画)に科研メンバーが研究成果(調査データ、写真、専門的知見等)の提供を行なうほか、科研メンバーが科研の成果を大幅に取り入れて原稿執筆を行なった『在日コリアン事典』(明石書店、2010年刊)も刊行の予定である。

### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計13件)

- ① 宮下良子「済州スニム(僧侶)のトランスナショナルリティー大阪市生野区の事例を中心に—」『白山人類学』12、35—51頁、2009年、査読あり。
- ② 政岡伸洋「差別と人権の民俗学」『日本民俗学』252、5—34頁、2007年、査読あり。

[学会発表](計10件)

- ① 岡田浩樹「混線する民族の境界線—『多文化共生』以前の神戸・長田—」日本民俗学会第61回年会、國學院大学、2009年10月4日。
- ② 宮下良子「周縁の民俗誌—大阪府堺市の在日コリアン・コミュニティの事例から—」日本民俗学会第61回年会、國學院大学、2009年10月4日。

[図書](計4件)

- ① 島村恭則『〈生きる方法〉の民俗誌—朝鮮系住民集住地域の民俗学的研究—』関西学院大学出版会、2010年、321頁。